安岡章太郎『海辺の光景』論

――信太郎の経験をめぐって――

安藤陽平

肉親との死別という多くの人々が回避し得ない出来事において、残された子の側に何が経験されるのか。実母の死を契機として書かれた安岡章太郎の『海辺の光景』（一九五九・一二、講談社）はその問いに対する彼なりの解答であった。

その見方は研究史上決して新しくはなく、むしろオーソドックスなものだ。しかし中村三春「反エディプスの回路」（『〈変異する〉日本現代小説』二〇一三・三、ひつじ書房）が喝破したように、先行研究には、本作が描く母子関係を単純化されたエディプス・コンプレックス理論から解釈したものが多い。その視座を制度化したのが江藤淳『成熟と喪失』（一九六七・六、河出書房新社）である。「子」の「成熟」は「母」を見棄てた「悪」を引き受けることで達成されるとする江藤は、本作の信太郎はラストで「悪」から目を背けたと糾弾し「成熟」を否認した。一方中村は、本作はむしろ江藤の言う「成熟」やエディプスなる「大きな物語」を解体するポスト・モダン的な作品であると論証し、議論を進展させた。

中村以後は必ずしも母子関係を主題化しない論考が呈示されつつあるが[1]、それでもなお本稿では、母の最期を前にした息子に訪れるドラマの内実を問うてみたい。そこで、従来の単純なエディプス的読解に陥らないための方策が必要となるが、まずは本作の内容・構成を見てみよう。

「老耄性痴呆症」（現在で言う認知症）を患い「永楽園」に入院させられた母・チカの最期が、息子・信太郎に焦点化しながら語られていく。やや入り組んだ構成で、信太郎が見舞いに訪れてからの九日間を現在時とし、随所に彼の回想が挿入される。

杉本和弘「「海辺の光景」論」（『中部大学国際関係学部紀要』一九九八・三）が指摘するように、信太郎は「息子としての自分のありようや立場」を過剰なまでに意識する。それは彼の現在時の言動のみならず、回想にも作用している。回想では敗戦直後の浜口一家の窮状や、彼が両親と別居した経緯などが語られるが、基本的にはチカの「痴呆症」をめぐってなされていると言っていい。だがそこには、息子意識ゆえの操作がある。それに留意して

彼の回想・現在時の言動を読解することで、先行研究とは異なる解釈も導かれるだろう。

以下では、まず信太郎の息子意識について確認したうえで、彼の回想における操作を明らかにする。そして、臨終間際の母を前にして回想に耽る行為それ自体の意味を検討する。見舞いに駆けつけた信太郎は、チカに対してほとんど何らのはたらきかけもせずに過去を遡っている。そのことの意味、そしてそれと現在時の出来事との関連を見定めることで、チカの死後に彼がとらえた「一つの〝死〟」が意味するところも明らかになり、本稿の問いは究明されるはずだ。

一　〈息子〉ゆえの「ヤマシサ」

母が危篤との報せを受け、信太郎はチカの入院する「永楽園」を訪れた。だが彼は、始終チカに対してケアらしいケアができずにいる。古川裕佳「介護と〈反介護〉の風景」（米村みゆき・佐々木亜紀子編『〈介護小説〉の風景［増補版］』二〇一五・五、森話社）は、その理由を「母に正気でいて欲しい、昔のままの母でいて欲しいという思いの反映」と見た。[2] 中西泰子『若者の介護意識』（二〇〇九・七、勁草書房）によれば、親のケアにあたっては親子間の関係性（ケアする―される）の再構築が必要となる。それに倣って言えば、信太郎は依然としてチカとの関係において自らを息子（ケアされる存在）として規定しており、それがケアに対する障壁になっていると言える。

中西は、娘に比べて息子は、母との関係性をうまく再構築できない傾向があると述べる。その背景には、母との紐帯を「未熟」・「未発達」として忌避する成熟モデルが存在する。「息子介護」を研究する平山亮『介護する息子たち』（二〇一七・二、勁草書房）が指摘するように、そこに「ケアされる立場から降りようとしない男性の姿勢」が垣間見える。

ただし、信太郎の場合はもう少し個別の文脈がありそうだ。[3] まず、「夫の信吉は内地にゐるときでも留守勝ち」で、彼はチカと二人で生活することが多かった。そうした状況もあってチカは信太郎を溺愛しているが、その母子密着的生育環境は、息子の立場を降りがたくするひとつの理由であろう。[4]

また、ケアされる立場から降りようとしないという意味での息子性はケアの観点から見た際の問題であるが、彼の回想・現在時の言動を分析する際には他の問題が重要となる。杉本一「海辺の光景」論」（前掲）は、信太郎は「孝行規範」に強くとらわれていると指摘した。信吉にたしなめられ、「彼等は、おれが〝孝行息子〟ぶらうとしてゐると思ったのではないか？」と推理する姿はその一例である。そうであるがゆえに、鳥居邦朗「鑑賞」（『鑑賞日本現代文学28　安岡章太郎・吉行淳之介』一九八三・四、角川書店）が述べる、「父母を故郷に帰し自分だけ東京に留まった」ことに対する「ヤマシサ」が信太郎に抱かれることになる。本稿ではこうした「孝行規範」にとらわれた息子を括弧付きの〈息

子〉と呼ぼう。

この〈息子〉ゆえの「ヤマシサ」にこそ目を向けねばならない。それは現在時まで霧消することなく信太郎を苛んでいる。チカの死後、彼は「たとひ九日間でも、そのあひだ母親と同じ場所に住んでみることで、せめてもの償ひにするつもりだったのだらうか？」と自問する。見舞いを「母親と同じ場所に住んでみる」と表現することに、両親と別居したことへの自責があらわれているが、ここでの唐突な「償ひ」という言葉こそ、現在時でもなおその「ヤマシサ」が彼をとらえて放さなかったことを示すものである。

では、その「ヤマシサ」による作用について、まずチカの「痴呆症」に対する信太郎の認識を追ってみよう。作品発表当時では、「痴呆症」を精神病と見なす傾向が強かったが[5]、彼も「痴呆症」になったチカを「正常の意識を失ってゐるもの」、「狂気」と認定する。したがって回想では、「狂気」を例証するようにしてチカの不審な言動が挙げられていく。目つきの変化にはじまり、高知に帰る際の「わたしはこのまま東京でくらすことにしました」という突拍子もない発言、「相好」の「急激」な衰弱などが語られ、「狂気」の徴候と意味づけられる。

しかし、信太郎は彼女の「狂気」を信じかねてもいる。右に見たように、彼も事ある毎にチカの様子から「狂気」を見出す。その一方で、たとえば彼女からの手紙を「母の狂気を執拗に否定するために」「数百回、数千回」と読み返したりする。「それが母親に対する愛情のせゐでないことは、たしか」だと信太郎は言う。

再び杉本「「海辺の光景」論」（前掲）を引けば、信太郎は信じられないのではなく、信じたくないからチカの「狂気」を執拗に否定するのだろう。信じればそこに自身の関与を認めざるを得なくなるからだ。チカの場合、鵠沼の借家を立ち退き信太郎と離れたことが「痴呆症」に影響しても不思議ではなく、それに信太郎が無自覚であるはずもない[6]。だが彼は、「自分にいっさい無関係のところで母の病因を考え、みずからとの関連において病因を探ることを避けている」（川嶋至「安岡章太郎私論」『群像』一九七〇・九）[7]。そうした自己免責を促すものこそ、「ヤマシサ」にほかならない。

もっとも、それはあくまで「ヤマシサ」による作用の一例に過ぎない。次節ではさらに彼の操作を掘り下げていこう。

二　後景化されるチカの姿

二―一　叫びは聴き取られない

信太郎はチカの「狂気」の徴候をいくつか回想するが、次の手紙は象徴的である。

おとうさんは　またニハトリをかひはじめました　中古のこはれそこなひの自テンシャを高いおカネを出して買ってきて

それでまい日ヱサを買ひに行ってゐます　どうせ卵を売ってもヱサ代と同じぐらゐにしかならないのだからアホウらしいこと（…）／こちらへ来てから　おとうさんは誰とも口をききません　伯父さんとも一言も口をききません／伯母さんはとてもワルイ　ワルイ　ひとです　まい日オコリどほしで　この間もマキをもってわたしを追いかけてきました／マキでわたしを叩きます　わたしにハダカになれといってゐど端でハダカにしておいてばんばんと叩きます／はやく東京へ行きたい　一日もはやく東京でくらしませう

例によって、この手紙も元々は「二三字書いただけでクシャクシャに消したり、デタラメにインクをなすりつけただけのやうな字の並んでゐるレターペーパー」であったと前置きされる。その結果、内容も疑わしいものとして読者に見なされることになるだろう。

しかし注意深く読めば、信吉の養鶏再開は同時期に届いた彼自身の手紙にもあることに気付く。体裁だけで内容を妄言と切り捨てることはできない。

そこで、傍線部を中心に検討してみよう。まず傍線①は、帰郷後の信吉と伯父の軋轢を示唆する記述である。一方の信吉の手紙には、伯父夫婦との関係は良好と記されている。

だが、少なくとも帰郷前のそれは良好とは言いがたい。信太郎の回想に、伯父に援助を頼みに行った信吉がニワトリだけを手に帰宅した出来事がある。チカは「兄さんと喧嘩でもしてきたんぢゃないか」と予想し、信太郎はニワトリだけで「援助が打ち切られ」たのではと察する。他の親戚は「どうしてY村へかへって本家の世話にならないのか」と問うたが、「伯父の元吉からは何の音沙汰もなかった」。こうした関係が修復されたのかは語られないものの、①は一定程度信憑性のある記述だと言える。

しかし「どちらの手紙が本当なのか、信太郎にはわから」ず、「たしかなのは、どちらを読んでも憂鬱な心もちにさせられるといふことだけだ」とある。帰郷後の信吉と伯父の関係は、この時点での信太郎にはわかりようがないのだから、帰郷前の様子から推測するしかない。したがって、どちらかと言えば信吉の手紙に疑義を抱くのが自然であるはずだが、信太郎は「憂鬱」さから判断停止してしまい、真偽の追求には向かわなかった。

おそらくその理由は、チカを信じれば信吉の実家に送った自身の行為によって彼女が苦しんでいる事実を突きつけられる一方、信吉に拠っても彼女の「狂気」を認めることになり自己免責は不可能になるからだろう。信太郎は身動きとれずに判断停止するほかなく、高知で暮らすチカの姿への想像力を放棄してしまうのだ。

次に傍線②だが、たしかににわかに信じがたい。信太郎は「被害妄想」と考えている。

ただし、彼の反応には疑問も残る。彼はチカの様子を見に高知へ行った際、伯母がチカによる「被害者の一人であること」を

「強くただよはせていた」と感じ取っていた。チカの世話に対する苦労を訴える気配を感じたということだが、ならばチカに対する伯母の態度を想像してもいいのではないか。しかし信太郎は、「まったく考へやうがない、あきらかにそれは母の被害妄想であっただらう」と考える。「だらう」と断定できずにいる様子に、そうでない可能性の認識が窺えるが、結局この件もこれ以上追求されない。

では、右に見たような信太郎のふるまいによって後景化されたチカの姿とはどのようなものであろうか。それを想像するとき、「被害妄想」はひとつの手がかりとなる。事実としてそれが「被害妄想」であったとしても、だからと言って一蹴しないのが近年の「痴呆症」ケアだ。

作品発表当時から「痴呆症」＝精神病という認識があったことは確認したが、近年では精神疾患として、よりケアを重視する考え方が普及している。なかでも小澤勲は、『痴呆老人からみた世界』（一九九八・六、岩崎学術出版）・『痴呆を生きるということ』（二〇〇三・七、岩波書店）・『認知症とは何か』（二〇〇五・三、岩波書店）などの著作を通じ、従来「問題行動」と呼ばれてきた「痴呆症」者の言動を彼らなりの表現として読みかえるケア方法を唱えた。[8] これは特に周辺症状（BPSD）に有効な手立てとされる。[9]「周辺症状の成り立ちを解明するには、医学的な説明によってではなく、認知症という病を生きる一人ひとりの生き方や生活史、あるいは現在の暮らしぶりが透けて見えるような見方が必要」（『認知症とは何か』）だと小澤は言う。

「被害妄想」は周辺症状に含まれる。小澤『認知症とは何か』によれば、彼らは「自分が人に迷惑をかけていることも、自分が周囲からどのようにみられ扱われているかということも、彼らはとても敏感に感じとっ」っており、そのせいで「不安に陥り、怯えている」。「被害妄想」は伯母の態度を察知しての表現だったとも読めるわけだ。

チカは信吉の実家で、「すぐどこかへ出掛けてしまひ、出掛けると一里も二里もとほくの見知らぬ家に上りこんでゐたり」したという。これを「徘徊」と見るなら、その背景には「新しい場や関係にまだなじめないでいる」（小澤『痴呆を生きるということ』）ことへの不安がある。そもそも、「東京で生れて、大阪で育った」チカの都会人気質が、地域で旧家と呼ばれる封建的な家に生まれ育った信吉とは合わないと信太郎自身が考えていた。彼女のストレスを想像することも決して難しくなかったはずだ。

「一日もはやく東京でくらしませう」という手紙の一節は、信太郎への愛着はもちろんだが、信吉の実家からの脱出を希求する叫びでもあったに違いない。それは聴き取られないまま、作品に谺している。

二―二　物語化される「クヒチガヒ」

信太郎は「大学病院の神経科の医者」から、「老耄性痴呆症」

とは「田舎の農婦などで、比較的頭脳をはたらかせることのなかった者が、ある年齢から脳細胞が急激に衰弱するために起る」と説明を受けていた。しかし彼は、「夫の信吉は内地にゐるときでも留守勝ちであり、生活を保証されて、息子と二人でくらすことの多かった」チカの場合、「さうした気楽なくらしと、戦後の逼迫したそれとのクヒチガヒ、それにたまたまその時期に生理的に変調をきたす更年期がぶっつかったことによるのではないか」と自説を展開する。

実は、この姿勢は先の小澤による提言に近い。小澤は、「痴呆症」者それぞれの人となりや人生を踏まえ、「だれにも譲れない一人ひとりの固有の物語[10]」（『認知症とは何か』前掲）を読むケア方法を説いた。チカの「痴呆症」の原因を医学的説明で片付けるのではなく、戦前／戦後の生活における「クヒチガヒ」に見出す信太郎は、彼女の「固有の物語」に迫ろうとしたのだ。

だが、と言わねばならない。信太郎が回想する「クヒチガヒ」は、外地赴任で長らく不在だった父・信吉の帰還に代表させられている。「〔チカが〕崩れはじめる最初の要因は、そのころに築かれたものかもしれなかった」と回想する信太郎が直後にとりあげるのは、帰還したばかりの信吉とチカの間に頻発する諍いの様子であり、そこで「泣いてゐるやう」な声をあげる彼女の姿なのである。

後述のように、たしかに信吉の帰還はチカの心身を疲弊させた。だが、息子を溺愛するチカにとっては信太郎との別居も「クヒチガヒ」だったはずだ。先の川嶋「安岡章太郎私論」（前掲）が指摘した信太郎の自己免責もこの点を言ったものであった。

急いで付言すれば、この操作を〈息子〉ゆえの「ヤマシサ」のみによるとするのは一面的である。しかしその作用は疑えないため、ここではまずその観点から見ていこう。

山崎省一『安岡章太郎論』（二〇〇四・一一、沖積舎）はチカの「痴呆症」について、「決定的な要因は、最愛の息子であり生きる支えともしてきた信太郎との別離にあった」と述べる。ただし、「母性」が神話に過ぎない以上、息子を溺愛する〈母〉の心性も歴史的社会的に形成されたものでしかない。信太郎との別離が影響したとして、なぜそれが影響したかは別に考察する必要があるということだ。

それを考える材料としては、チカのテーマ・ソング――「をさなくて罪をしらず、むづかりては手にゆられし、むかし忘れしか。春は軒の雨、秋は庭の露、母は泪かわくまなく祈るとしらずや」が適当である。信太郎はそれを「半ば習慣的、無意識のものだった」とし、「無意識なだけに、母親の情緒の圧しつけがましさが一層露骨に感じられた」と回想する。

江藤『成熟と喪失』（前掲）はこの「圧しつけがましさ」を、学校教育制度の確立により階層が流動化した社会を生きる「母」の「動揺の表現」と解釈した。江藤の不足を補ったのは、解説を寄せた上野千鶴子「『成熟と喪失』から三十年」（『成熟と喪失』一九九三・一〇、講談社）である。上野が述べるように、チカと

信太郎のような「母子密着」には「専業の母」の成立が関わっている。専業主婦は本作の浜口一家のような「新中間層」において誕生した。その基盤が、明治期以降の女子教育を中心に広められた良妻賢母思想であった[11]。チカの過剰な情緒は、国民国家の創出したジェンダー規範によって要請されたものでもあるのだ[12]。

以上を背景に見据え、チカの場合を個別的に検討してみよう。安岡・秋山駿「私の文学を語る」（『三田文学』一九六八・六）に興味深い発言がある。江藤はテーマ・ソングをアメリカの子守唄と対比し、前者に息子の「成熟」を「呪詛」する日本的母子関係を見た。だが安岡によれば、テーマ・ソングは「プロテスタントの宣教師達の歌」から採ったもので日本の歌ではない[13]。同歌には「母のセンチメント、アメリカの孤立した家庭の主婦の、あるいは寡婦の悲しみが猛烈に滲んでいる」と安岡は解説する。

杉本優「安岡章太郎」（『解釈と鑑賞』二〇〇六・二）は右の発言をもとに、「外地赴任で長く不在である夫への思い」が潜むテーマ・ソングを「母子の関係内だけで受け取」ってしまう信太郎の視野狭窄を指摘した。しかし、「孤立した家庭の主婦の、あるいは寡婦の悲しみ」を「夫への思い」という異性愛コードだけで解釈することには留保が必要である。

テーマ・ソングは信太郎が「子供のころから」繰り返されていた。信吉は外地赴任の前から転勤がちだったようで、信太郎の回想では「父の任地がかはって、弘前の小学校から東京へ出てき」た際の出来事が語られる。彼は自分が話す方言に悩まされ、「学校で自分一人が異った声で話してゐるやうな」孤立感を覚えた。

信太郎視点であるため意識しづらいが、類似の悩みはチカにも抱かれたであろう[14]。言語の差異は人間関係を築く障壁として十分である。そもそも、度重なる転勤が孤立を招きやすいことは想像にかたくない。

エヴァ・フェダー・キテイ『愛の労働あるいは依存とケアの正義論』（岡野八代・牟田和恵訳、二〇一〇・九、白澤社）は、「依存する子のケアをする人のケア」の重要性を説く。「夫の信吉は内地にゐるときでも留守勝ちで」「息子と二人でくらすことの多かった」チカは信太郎のケアを一手に担っていたが、彼女へのケアが配備されていた様子はない。その役目が夫である必要はないものの、転勤の繰り返しでは親密な人間関係を構築・維持しがたかったであろう。残された拠り所は信太郎しかなかったのだ。テーマ・ソングに潜在する「悲しみ」は、そうした孤立に由来している。

四方田犬彦「解説」（『海辺の光景』二〇〇〇・八、新潮社）は、東京を去る際にチカが忘れた「ワニ革のスーツ・ケース」について、「厳重に紐で縛りあげられたワニ革のカバンは母そのものであり、彼女の人生が絶え間なき抑圧と自己防御の連続だったことを物語っている」と解釈する。四方田が具体的な検討をおこなっていないことには注意すべきだが、ここまで見てきたように、チカの〈母〉としての心性は国民国家によるジェンダー配置を淵源とし、より実際的には家庭環境からくる「悲しみ」から身

を護る術として構築されたものである。それは、彼女に許された数少ない「自己防御」のひとつであったに違いない。

そう考えるなら、これをチカの戦前／戦後の「クヒチガヒ」＝断絶として定位するのは誤りだろう。それは戦前から地続きのものとしてあったのであり、言うならば「近代」が準備した〈母〉の「悲しみ」にほかならないのである。

三　見慣れぬ「顔」を掘り起こす

ところで、信太郎の回想は次のようにはじまっていた。

彼は、夕暮のなかに、ふところ手して立ってゐる母の顔をおもひ描いた。そこには子供のころから見慣れた敎かずの顔があった。ながい石段をのぼって小学校の教師の家へ、いっしょに学業の不成績をあやまりに行ったときの顔、夏休みの学校の寮から前ぶれなしに帰ってくる息子を迎へる顔、軍隊の病院へヒョックリ見舞にやってきて、空襲で家が焼きはらはれたことを話す顔、鵠沼海岸の家をあしたは引き払ふといふ日の顔、そして昨年の夏の夕方、Y村の伯父の家で門から玄関までを一人で無意味に往きつ戻りつしてゐる顔……。それらの顔は、この憂愁にみちた風景を背後に置いて、みんな憶ひ出すのに大して手間のとれるものではなかった。けれども、それらをとほしてどの部分が母の狂気につながるものかを考へると、彼はただ混沌とするばかりだ。

ここで信太郎が想起するチカの「顔」は、「子供のころから見慣れた」「憶ひ出すのに大して手間のとれるものではな」い点で共通している。すなわちそれは、「情緒の圧しつけがまし」い〈母〉としての「顔」である。重要なのは、それを想起しても「狂気」には繋がらず、彼は過去を遡りはじめたということだ。したがって回想は、彼が気に留めてこなかった、〈母〉以外のチカの「顔」を記憶の底から掘り起こす試みとなるだろう。

実際、彼は回想を通じて当時の認識をあらためている様子である。たとえば一家の生活状況が好転しはじめた時期、それと反比例するようにチカは金銭勘定の間違いや物忘れをするようになる。信太郎は「挙動にあやしげなものを見せはじめてゐた」と回想する一方、当時は「それを彼女の神経が異状をきたしたためだとは誰にも考へ及ばなかった」と付言する。つまり、当時はそう認識できなかった言動を、回想を通じて「狂気」の萌芽を示す「あやしげな」言動として再定位しているのだ。その意味で彼の回想とは、チカを再解釈する営為だと言うことができる。

回想の主たる内容が父・信吉の帰還に代表させられていることは先に見た[15]。付言したように、その動機に〈息子〉ゆえの「ヤマシサ」だけを見るのは一面的である。それは回想の発端に、〈母〉としてのチカの「顔」を想起しても「狂気」には繋がらないという判断があったからである。彼の回想にはそうした真摯な姿勢も

混在しているのだ。

では、回想を通じて信太郎が〝発見〟したチカの「顔」はどのようなものか。日中事変の初期から外地赴任していた信吉は、敗戦翌年に南方から帰還した。親子三人が揃うのは実に一〇年ぶりで、「それは奇妙なものだった。父親といふよりは遠い親戚のやうにも思へた」と彼は振り返る。

違和感はチカにも抱かれた。食卓を囲む際「暗黙のうちに母と信太郎とが組になって父に対峙するかたち」になったり、父母の間に諍いが頻発したりする。信太郎は、「カン高い母の声は泣いてゐるやうだった」とチカの心情に迫るように回想する。チカは信吉と寝間を別にするようになった。池内輝雄「「海辺の光景」のチカ」（『国文学』一九八四・三）は同箇所を「性格的不一致が性的不一致へと進行した」と分析する。信太郎がこの出来事をもって「〔チカが〕崩れはじめる最初の要因」と定位することはすでに見た。

それだけではない。戦前・戦中のチカと信太郎の「気楽なくらし」は、職業軍人である信吉の給料に支えられていた。しかし敗戦とともに信吉は失職し、一家の収入源が断たれてしまう。あまつさえ、叔父から借りている鵠沼の家を立ち退くよう宣告される。

にもかかわらず、信吉は「捕虜収容所の生活」を延長するかのように庭いじりや養鶏に没頭し、信太郎は軍隊で結核を患って「彼一人の配給物資を買へる程度の金」しか稼げない。チカの負担は必然的に増大していった。はじめ信吉と共に養鶏を試みたチカだが、目算が立たないと判断して「近所となりの洗濯物にアイロンをかけることから、闇物資のブローカアの手伝ひ」など様々な労働に奔走しはじめる。本格化する借家の追い立てに対抗策を講じたのもチカであった。

川嶋「安岡章太郎私論」（前掲）に倣って、こうしたチカの奔走を「息子と一緒の生活に執着した」ためと解釈することは容易い。しかし、信吉の実家を頼っても期待できなかったのだから、鵠沼の家を立ち退けば一家は文字通り路頭に迷っていたはずである。そうでなくとも彼らは「ぼろ布をつづり合せるやうな毎日」を生きていたのだ。息子への愛情は否定できないが、まずは生存に関わる経済的困窮こそチカの奔走を促した要因である。

さらに、チカが働くと「女手のない家の中は次第に乱雑をきはめてきた」とあり、これまで通りの家事労働が彼女に期待されていた様子も窺える。ここにジェンダー規範を指摘することは容易いが、作品に即して言えば、不自由な信吉と信太郎を抱え、チカは一家に必要な労働のほとんどを担わざるを得なかったことを、信太郎が回想していると言うべきである。こうして信太郎は、信吉の帰還を機に徐々にチカの負担が増大したことを振り返りながら、それと結びつけて「狂気」の兆候を探索していく。

そこで信太郎の前に浮かび上がってきたチカの「顔」は、たしかに「子供のころから見慣れた」それとは異なるだろう。言うなればそれは、生存を賭けて一家を牽引する一人の生活者としての

チカの「顔」である。信太郎は回想を通じ、そうした見慣れぬ彼女の「顔」を〝発見〟し、チカという女性と出会い直しているのだ。

四　「一つの〝死〟」について

以上見てきたように、信太郎の回想には〈息子〉ゆえの「ヤマシサ」が介在しており、その作用として物語の操作があった。一方、「痴呆症」の原因を真摯に検討する姿勢も見られ、その先で彼はチカと出会い直していた。彼の回想をこのように意味づけたうえで、それが現在時とどのように関連しているか分析していこう。

「永楽園」に来た信太郎は、「変型した母の容貌」に「以前の彼女のおもだち」を見出し、顔の各部から「昔からなじんだ部分部分のなごりを憶ひ出」す。彼は鵠沼の家を立ち退く前後で「もう父や母といっしょに住みたくはない」と思っていた。チカの「痴呆症」が激しくなり見舞いの催促が来ても、「二十時間以上も汽車にゆられ、海をこえ、四国山脈のトンネルを無数にくぐりぬけ、そのあげく老人の顔を眺めて、同じコースを帰ってくる」ことを「考へただけでもウンザリ」している。「老人」という呼称から、信太郎がすでに両親への情を喪失している様子が窺える。それが、実際にチカを前にしたことで、「母であることを感じれば感じるだけ、口をひらかうとするとギゴチなくなってしま」いもするが、在りし日の関係性を想起し、紐帯を取り戻すかのような様子が語られていく。その最たる例が、褥瘡の手当に苦しむチカの手を握りながら「何か想ひ出すもの」を感じる場面であろう。

だが、ようやく落ち着きを取り戻したチカが発した一言は、「おとうさん」だった。信太郎は「掌の中で何か落し物でもしたやうな気」になっている。彼は何度もこの出来事を反芻するが、「不思議」という印象を拭えない。チカは信吉を非常に嫌っていて、「自分も父が嫌ひになったのは、この母の影響のせゐにちがひない」とまで考えていたからである。

石原千秋「裏返された家族」（『教養として読む現代文学』二〇一三・一〇、朝日新聞出版）は同箇所を、信太郎の〈母〉としてのチカが「「父」の「妻」に変容」した瞬間と見た。本稿に沿って言い換えれば、信太郎は現在時でも不意に、信吉の「妻」としてのチカと出会い直しているのである。[16] 回想と現在時の出来事を通じ、信太郎がチカと出会い直す物語、それが『海辺の光景』だと言っていい。

チカの死後、信太郎は「誰に遠慮も気兼ねもなく、病室の分厚い壁をくりぬいた窓から眺めた〝風景〟の中を自由に歩きまはれること」を「たとへやうもなく愉し」む。小笠原賢二「流動化する「家族」」（『昭和文学研究』一九九九・九）は、同箇所が「母の死がまぎれもなく解放であることを教える」とする。

〈母〉からの解放、それは同時に、〈息子〉からの解放をも意味

する。息子とは母がいてはじめて成り立つ関係的存在だからである。同じように、母もまた関係的存在で、彼女は夫の「妻」でもあり、そもそもは一人の人間である。自明すぎるほど自明なその事実は、「情緒の圧しつけがまし」い〈母〉に育てられ、かつ〈息子〉ゆえの「ヤマシサ」に苛まれていた信太郎には見えていなかった。

ただし、解放は単にチカ＝〈母〉の死によってなされたのではない。それは、回想や「おとうさん」の一言によるチカとの出会い直しによって贖われたのでなければならない。ここでチカとの出会い直しがもうひとつの意味を帯びる。それは意図せずして、信太郎自身の〈息子〉意識を引き剥がしていく過程にもなっていたのだ。[17]

「一つの〝死〟」はその過程の終着点に位置する。中村「小説に描かれた風景」（前掲）が示唆するように、「一つの〝死〟が自分の手の中に捉へられたのをみた」というラストの表現は、先の「落し物」と対応している。[18]「落し物」はチカとの紐帯だと見ていいが、しかし「一つの〝死〟」は密着的母子関係の終焉だけを意味しない。

チカと出会い直した――〈息子〉から解放された――信太郎には、もはや彼女の死を単なる〈母〉の死ととらえることは不可能であるはずだ。窮状を一身に背負って奔走した生活者としての、信吉の「妻」としての、そして信太郎のよく知る〈母〉としてのチカ。信太郎が手にした「一つの〝死〟」とは、それらを統合した一人の女性としての彼女の「〝死〟」なのである。

一人の女性としての母と出会い直し、そのことによって同時に〈息子〉から解放されること。信太郎の場合、その鍵を握っていたのはチカの「顔」をめぐる回想であった。それは、母との関係性を再構築しがたいという意味での息子の問題を考える際にも示唆を与えている。本作について言えば、チカとの出会い直し＝〈息子〉からの解放がチカの死の前後にしかなされ得なかったことは悲劇であり、したがってその困難さもまた描いていることになるが、それも含めて『海辺の光景』における〈息子〉のドラマだと言わねばならない。

注

（1）同時代の精神病を取り巻く状況から読む木村功「精神病院の光景」（『〈病〉の言語表象』二〇一六・三、和泉書院）、風景描写とそれを見る人物の関係に注目する中村ともえ「小説に描かれた風景」（鈴木健一編『浜辺の文学史』二〇一七・二、三弥井書店）など。

（2）ただし本作に即して見る限り、この点を一概に批判することも難しい。後述のように、見舞いに訪れるまでの信太郎にとって、チカはもはや「老人」に過ぎなかった。それが「永楽園」に来てから何とか関心を持続できたのは、過去の母子関係を想起していたからだとも言えるのである。その意味で、本作は密接な母子関係を両義的に描いてい

る。

（3）男性的な成熟モデルは、むしろ江藤『成熟と喪失』（前掲）をはじめとするエディプス理論に拠った先行研究、そして作者安岡にこそ当てはまる。江藤については本稿冒頭で紹介したが、安岡も「これを書かなければ僕は母親から自立することは出来」（『僕の昭和史Ⅱ』一九八四・九、講談社）ないと考えていた。

（4）中西『若者の介護意識』（前掲）にも、「母息子関係は、母親が家庭内のケア役割に専念しているほど親密になる」という指摘がある。

（5）村松常雄『精神衛生』（一九五〇・一一、南山堂）は、人間は六五歳前後から「老年期」に移行し、記憶力・理解力の衰退や感情起伏の激化など「所謂老耄の状を呈するに到る」が、「その程度が病的に烈しいものに老年性痴呆症なる精神病がある」と説明する。新村拓『痴呆老人の歴史』（二〇〇一・七、法政大学出版）によれば、「老人性の痴呆が精神病とみなされるようになったのは、幕末から明治期にかけて導入された西洋医学の考え方にもとづ」く。ゆえに「痴呆症」は医療の対象とされ、精神病院への入院が少なくなかった。

（6）大久保典夫「安岡章太郎における母子関係」（『解釈と鑑賞』一九七二・二）に、「この息子が、母を狂気に追いやつたものについて、自分と一緒に暮らしたがつていた彼女を無理に父親の郷里に追いやつたからだと思つていることは間違いない」との指摘がある。

（7）川嶋も述べるように、それは本作の原型である「故郷」（『文芸』一九五五・七）との比較でより明確になる。「故郷」の「僕」は「東京をはなれるといふことが、それまで母を支へてゐたシンバリ棒をはずしてしまつた」と考える。「東京をはなれる」とは「僕」との離別の謂である。他方、本作の信太郎は戦前／戦後における生活の「クヒチガヒ」に原因を見る。「僕」の考えより多義的で、その分だけ自己の関与と向き合うことから遠ざかっていると言える。

（8）加藤伸治「認知症の人のためのアセスメントとはなにか」（日本認知症ケア学会編『改訂・認知症ケアのためのケアマネジメント』二〇一八・四、日本認知症ケア学会）は、過去に「認知症という「病気」をみて「人」をみなかった」時期があり、その反省として近年「認知症の人の苦しみや不安、周囲の人になにを求めているのかを知り、それにこたえていくことの大切さ」が浸透してきたと整理する。同論もまた、「痴呆症」の症状は「われわれに対するメッセージであるととらえなければならない」と説く。

（9）小澤によれば、「痴呆症」の症状は中核症状と周辺症状に分けられる。中核症状は「認知症をかかえる人にはだれにでも現れる症状であり、記憶障害、見当識障害、思考障

害、言葉や数のような抽象的能力の障害など」で、主に脳疾患を原因とする。周辺症状は妄想・幻覚などの精神症状から、徘徊・弄便・収集癖・攻撃性などの行動障害を含む。これは中核症状に「心理的、状況的要因が加わって二次的に生成される」（『認知症とは何か』前掲）。その要因には、配偶者との離別や住む場所の変化、家庭状況の変化といった様々な日常生活上の出来事（「ライフ・イベント」）も含まれる（『痴呆を生きるということ』前掲）。

（10）小澤はこれを「物語としての痴呆ケア」と名付けた（小澤・土本亜理子共著『物語としての痴呆ケア』二〇〇四・九、三輪書店）。小澤は同理論を用いて耕治人の「命終三部作」（「天井から降る哀しい音」（『群像』一九八六・七）・「どんなご縁で」（『新潮』一九八七・一一）・「そうかもしれない」（『群像』一九八八・二）など「痴呆症」を描いた小説を分析しており、本稿も示唆を得た。

（11）新中間層と専業主婦の誕生は落合恵美子『21世紀型家族へ【第三版】』（二〇〇四・四、有斐閣）、国民国家と良妻賢母教育は小山静子『良妻賢母という規範』（一九九一・一〇、勁草書房）などを参照。

（12）参考までに、チカのモデルである安岡の母・恒は高等女学校まで進んだ女性であった（安岡「春のホタル」（『文学界』一九八八・三）など）。

（13）江藤は『成熟と喪失』を単行本化する際に安岡の指摘を注記しているが、解釈に変更は見られない。なお土倉ヒロ子「『海辺の光景』安岡章太郎」（『群系』二〇一五・一〇）が述べるように、テーマ・ソングは賛美歌五一〇の二番である。

（14）作者安岡も職業軍人の父が転勤続きであったため、小学校だけで六回の転校を経験した。『僕の昭和史Ⅰ』（一九八四・七、講談社）には、弘前にいた頃の話ではあるが次のような回想がある。「言葉が通じないといっても、子供の僕は憶えるのが速いし、学校へ行けばとにかく土地の子供と遊ぶことは出来」た一方、「三十半ばの母の年齢になると言葉も憶えられないし、近所づき合いも出来ないわけ」で、「子供の僕が孤独であったとすれば、母の孤立感はもっと甚だしかったに違いない」。無論、母の心情は不問に付すしかないが、こうした考えをもつ作者の手になるのが本作だという点で参考になる。

（15）父の帰還と〈母〉以外のチカの「顔」の結びつきについては作者の解説もある。安岡は、「「青葉しげれる」や「相も変らず」は、「海辺の光景」と同じく母親を主題にしているとしても、その母親は「海辺の光景」の場合とは異質」（『戦後文学放浪記』二〇〇〇・六、岩波書店）と述べる。本作には「父親が介在して」いるからである。「青葉しげれる」をはじめとするいわゆる「順太郎もの」の母は、自己のすべてを息子に賭ける〈母〉であった。「海辺

の光景」では「父」が介在することで、〈母〉とは異なるチカの「顔」が浮かび上がっているのである。

(16) 安岡「ふとった母の記憶」(『婦人生活』一九六〇・四)によれば、この出来事は事実から採られた。安岡はその一言を聞くまで「母が父を愛していたのだということを、すこしも知らなかった」。彼もまた実母の臨終間際で彼女と出会い直していたのだ。注(15)で述べたように、安岡は本作以前にも母子関係を主題とした小説を書き継いでいた。それでもなお、「母のなかに封じ込められている〝戦後〟を自分の手でときほぐさなくてはならない」(『戦後文学放浪記』前掲)と決意して本作を執筆したのは、息子を溺愛するばかりの〈母〉を描いてきたことに不足を感じたからだろう。本作はしばしば初期安岡のひとつの到達点と評されるが、それは作者自身もまた実母との出会い直しを経験し、「順太郎もの」で繰り返されたスティロ・タイプではない多様な母の「顔」を描いたからにほかならない。

(17) 杉本「「海辺の光景」論」(前掲)にも、最終的に信太郎は「息子であることによる責任の意識や、心理的、精神的な負荷から自由になっている」との指摘があるが、それに至る経路の解釈に本稿との相違がある。杉本は、結末部の「母親はその息子を持ったことで償ひ、息子はその母親の子であることで償ふ」という信太郎の理解をとりあげ、この「宿命論的な理解」に到達した先に〈息子〉からの解放を見ている。

(18) この指摘は本作の構成から言っても妥当である。雑誌発表時、本作は『群像』一九五九年一一・一二月に分載された。そこでの区分は同年一二月に刊行された単行本(講談社)にも改頁として残されており、前半・後半の別をなしている。前半はちょうど「落し物」で終わり、後半ラストと対応するよう巧妙に配置されているのである。

附記

『海辺の光景』からの引用は単行本版(一九五九・一二、講談社)、その他の引用はすべて記した書誌に拠った。引用元の旧字は新字に改め、傍点・ルビ・文献副題は省略した。／は改行、(…)は中略、〔 〕は稿者による注記を示す。引用には今日から見て不適切な表現があるが、作品表現を尊重する目的から修正を加えていない。

なお本稿は昭和文学会・第六一回研究集会(二〇一七・一二、専修大学神田キャンパス)における口頭発表に加筆・修正を施したものである。当日の議論で貴重なご指摘をくださった方々に記して感謝申し上げる。

(あんどう・ようへい　本学大学院博士課程後期課程)